

『今月の天候と農作業』

通巻第5532号
6月号
平成23年6月3日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

天気は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

平均気温は平年並または高い確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 6月4日(土)～6月10日(金)

天気は、梅雨前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

〈2週目の予報〉 6月11日(土)～6月17日(金)

天気は、九州南部では平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

〈3週目から4週目の予報〉 6月18日(土)～7月1日(金)

天気は、九州南部では平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

〈次回の発表予定等〉

1か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は6月10日

3か月予報：6月23日(木曜日) 14時

普通作物

◆ 早期水稲

6月は雨や曇りの日が多く気温も高くなり、早いところでは6月下旬には出穂が始まりますので、生育状況を十分把握し適期作業を心掛けてください。

1 追肥

出穂の20日前から穂肥を施用しますが、幼穂が1割くらいに伸びたのを確認し、葉色の濃淡をみて適量を追肥します。

2 病虫害対策

穂いもちは、収量・品質を低下させる重要病害です。曇雨天が続く気温が上がると発生が多くなりますので、穂ばらみ末期と穂ぞろい期に予防的な防除を行いましょう。

また、カメムシによる斑点米は、等級格下げ要因の大半を占めています。良質なコメを作るため、穂ばらみ前に畦畔及び水田周囲の野草の刈り取りを終え、穂揃い期とその7～10日後の2回防除を徹底します。また、防除は周辺の作物に農薬を飛散させないように十分注意してください。

3 水管理

6月上旬以降の幼穂形成期に16度以下の低温が予想される場合は深水とし、低温から穂を守ります。低温でない場合は、穂ばらみ期まで間断かん水を行い、根の健全化に努めます。

◆ 普通期水稲

1 田植え

「ヒノヒカリ」は、夏に比較的冷涼な西北山間地域を除く地域で早植すると出穂が早くなり、高温登熟障害による白未熟粒が発生します。これを避けるため6月20日以降に移植します。一方、晩生種の「まいひかり」は、生育期間が長いため「ヒノヒカリ」より早い6月上中旬を基準とした田植えを行います。

2 水管理

移植直後から活着までは、植え傷みを少なくするため、5

㊦程度のやや深水にして稲を守ります。活着したら3㊦程度の浅水にします。

3 防除

いもち病やウンカ類の予防のために移植時に箱施薬を実施します。

4 除草剤

除草剤には、ノビエの葉期で処理晩限が標記されています。ノビエの葉期は水田内に発生しているノビエの最高葉齢で判断します。ノビエの葉齢の展開日数の目安は、一葉期が移植後5日目、二葉期が8日目となります。ただし、用水不足等で代かきから移植までの日数が延びると、ノビエの生育が早くなるので散布が遅れないように注意します。

処理時は最低水深5㊦は確保してください。

水管理の良否が除草効果に大きく影響しますので、散布前には畔や水尻から漏水がないか確認し、散布後は掛け流しにせず1週間程度止水しましょう。

(鎌田 博人)

果菜類

◆収穫終了後の管理

今月でほとんどの施設野菜の栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから太陽熱消毒（消毒法の欄を参照）を行いましょう。

昨年、本県のきゅうり栽培において、スリップスが媒介するウイルスによる被害が発生し、また、トマト栽培においても依然としてコナジラミが媒介するウイルスによる被害が見受けられます。

これらのウイルス病に一旦感染すると、回復は難しく草勢の低下等により収量は大幅に低下します。ウイルスの媒介は、ともに昆虫であり、ハウス内に生息する昆虫をハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残さを持ちだす前に、ハウス内の蒸し込みを10日間程度行い、ハウス外への飛散を防ぎましょう。

◆夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されますので、次の点に留意した栽培管理を行いましょ

- ① 通路や畦間に滞水しないよう、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水する。
- ② 着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果をおこなう。
- ③ 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。
- ④ 摘葉や整枝・誘引を適切に行い過繁茂を防ぎ、通風採光を良くする。
- ⑤ 換気を良好にし、葉の濡れ時間を短くする。

(郡司 孝幸)

葉茎菜類及びいも類

◆共通(排水対策)

梅雨期を迎えました。

畦や作物が冠水すると、根傷みによる生育不良や病気発生の原因となりますので、水田に作付けされているものは排水対策を徹底しましょう。

◆ほうれんそう

高冷地栽培では、順次、収穫、播種となり、4月に播種したものは、上旬から収穫期を迎えます。収穫時に緑が濃くて葉肉の厚い状態にするために、収穫予定の7～10日前からかん水を控えます。収穫後は直ちに次作の準備に取りかかり中旬には播種します。降雨が多くなり、べと病の発生しやすい環境となりますので、抵抗性品種を利用するとともハウス内の通風を良くしましょう。

◆らっきょう

中旬までには収穫を終えましょう。土壌水分の多いときに収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因になりますので、晴天の続くときに収穫しましょう。自家採種をする場合は、生育不良株を抜き取り、ネダニの防除を徹底し球が完全に肥大充実してから堀上げ、陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管します。

◆食用かんしょ

トンネル栽培は収穫時期となります。収穫は、植え付け後100日目から可能となりますが、試し堀りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると、皮色や形状が悪化しやすくなるので適期収穫に心掛けましょう。

◆さといも

トンネル栽培は収穫期となります。数株試し堀りを行って重量を計り、10aの換算収量が1トンに達したら収穫を始めましょう。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

今年の温州みかんは、表年にあたりますが、極端に着花数が多い状況ではなく、園地や樹によるばらつきが多く見られます。結果の多い樹では、6月中旬から、小玉果や内成り果を中心に荒摘果を始め、中玉以上の果実生産を目指しましょう。結果が少ない樹では、結果していない枝を前年の基部から除去しましょう。

品質向上のためのマルチ被覆は遅くとも6月上旬には済ませましょう。

◆かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300ミリの降雨があると薬剤の効果がな

くなります。250^{ミリ}程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょ。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らすようにしましょ。

◆ 完熟きんかん

今年は、4月の低温のために新梢の発芽遅れやばらつきが見られる園が見られます。特に温度の低い中山間地域では、開花までの間、昼間の温度30度を確保したり夜間の加温を行うことで、枝の緑化促進や良好な花芽の確保が可能になります。枝の緑化の状況を見ながら必要に応じて実施しましょ。

開花期のビニール被覆は、降雨による花粉の破裂を防ぎ、結果促進に効果があります。ぜひ実施しましょ。また、開花期以降はすぐに除去しましょ。

◆ マンゴー

日焼けや高温防止のための過度の遮光は、着色不良や糖度の低下を招きます。遮光ネット等のこまめな開閉により、十分な日照を確保しましょ。収穫前から収穫期間中の過度の節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょ。

収穫が終わった施設では、来年に向けた剪定等の作業に入らしましょ。枝が混み合い、日当たりの悪い園地が増加しています。隣の樹と枝が触れるようになったら、必ず間伐を実施しましょ。樹齢の進行と共に、着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では、思い切って改植を行いましょ。

樹冠の縮小を目的とした強度の剪定は翌年の花芽の着生を悪くするので、決して行わないようにしましょ。

剪定残さは、病気の発生原因となります。全て園外に持ち出して処分しましょ。

2 落葉果樹

◆ウメ・モモ・スモモ

収穫が済んだらお礼肥として、年間施肥量の3割程度を施用しましょう。

◆くり

夏肥の施用を必ず行いましょう。特に、樹勢が落ちたり果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。肥効をよくするために除草も行ってください。

(山口 和典)

花き

◆夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなりますので、気温の低下を図るとともに、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布等を実施してください。「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施してください。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を遵守しましょう。

系統や気象条件により節間の伸長具合が変わりますので、系統の特性と気象条件を勘案しながら適切なジベレリンの処理を行いましょう。

◆秋ギク

秋ギク電照の親株床の施肥量は、窒素過多による採穂苗の発根不良や冷蔵中の腐敗を避けるために、窒素成分で10㎡当たり10kg施用してください。本ぼへ病害を持ち込まないように、親株の定期的な予防散布を行ってください。また、梅雨時期になりますので、特に露地の場合は排水対策を心がけましょう。

◆デルフィニウム

播種及び鉢上げ期になります。288穴セル成型トレイで育苗している場合の鉢上げ適期は本葉2枚展開時です。夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、鉢上げ後から16時間夜冷を行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になりますので、生育に合わせた細やかなかん水管理を実施してください。高温、多湿の育苗期間中は、特にチビクロバネキノコバエによる被害が懸念されますので、定期防除に努めましょう。

◆ホオズキ

7月盆出荷を目標とした雨除け栽培では、6月中旬には着色のためのホルモン処理を行います。ホルモン剤散布後の高温は色ムラ発生の原因になりますので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は寒冷紗により遮光してください。

また、作り置きをしたホルモン剤は効果が低いので、散布液は必ず散布直前に調整してください。ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや薬害が発生しやすくなりますので、ホルモン剤散布時期より前にアザミウマ類・ダニ類・アブラムシ類並びにうどんこ病の防除を徹底してください。高温時には換気を徹底して、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

◆シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染の恐れが最も多い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させますので、適期防除に努めましょう。

(中村 広)

畜産・飼料作物

気温・湿度とも上がり、家畜の生産性の低下や下痢等の疾病が多くみられる時期です。畜舎への通風の妨げになるような資材の整理を行い、風の通り道を確保しましょう。また、畜舎カーテンの上げ下げにより、雨が畜舎内へ降り込み敷料等が濡れないよう気をつけましょう。

子牛で下痢が発生した場合は、石灰による牛舎消毒と敷料のこまめな交換を行います。下痢が発生している子牛に接触した場合は、人を介しての他の子牛へ下痢が蔓延しないよう靴底や手袋の交換等、徹底した消毒を心がけましょう。

飼料に関してはカビの発生が懸念されます。乾草や配合飼料の保管については、直接地面に置かずパレットなどを敷いてその上に置き、風通しの良いところで腐敗やカビの発生防止に努めます。飼槽や水槽にもカビが発生しやすいので、ブラシが届きにくい場所（特にカドや四隅）にもこまめな清掃を心がけましょう。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないようこまめにチェックを行いましょ。

長雨による排水不良は、飼料作物の生育を阻害しますので、ほ場周辺に排水溝を設置し、水が貯まりにくいようにします。冠水した場合は、生育不良となるので水が引いた後、10㎡当たり窒素成分で1kg程度の追肥を行いましょ。

昨年の口蹄疫発生から1年が経とうとしています。口蹄疫は依然として世界中で猛威を振り、特にアジアを中心に発生が続いています。これだけヒトやモノの流れが活発化している時代ですので、いつどこで口蹄疫が発生してもおかしくありません。自分の家畜は自分で守るという強い意識を持ち、牛舎消毒などさらなる防疫の徹底をお願いします。

(須崎 哲也)

工芸作物

◆ 茶

1 二番茶の摘採

一番茶摘採後40～45日頃から二番茶摘採が始まります。平年より8日早い梅雨入り、一番茶の遅れ、低温の影響等により、二番茶の摘採も遅くなり、摘採後半は作業が集中すると予想されます。このため、降雨の影響を考慮した摘採計画を立て、欠点の少ない荒茶生産を図ります。樹勢のある茶園では、4～5日間被覆し、一番茶の配合用茶葉として品質向上

を図りましょう。

被覆に伴う、黒葉腐れの発生や葉擦れ、葉焼け、摘採遅れは逆に品質低下を招くため、被害回避に注意が必要です。経費と相場を考慮した適正な収量・品質の確保を図りましょう。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は5～7日後が目安です。二番茶後の遅れ芽を除く程度で、摘採面を整えます。深刈は、二番茶後までに、10～15％低く、古葉が残らない高さで行います。また、一番茶後の中切園では中切55～60日後に中切面から3％の高さで一回目の整枝をします。

施肥は、二番茶摘採前後に速効性肥料を地区の施肥基準に準じ実施します。

定植当年から二年生までの幼木園では、台風被害回避のための防風対策として、ソルゴーの間作を行いましょ。また、5月に整枝していない二年生園では7月末までには徒長枝を前回より5％程度上げてせん枝しておきましょう。茶の根は湿害に弱いので、園内の排水にも注意します。

(岩切健二)

◆ しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30度を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35度以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、裸地伏込みの場合は、笠木の厚さが30％以上になるよう補充したり、西日が当たる部分の笠木の張り出しを長くする必要があります。林内伏込みの場合は、庇陰が十分でない箇所には笠木等を補充し、周囲の下刈や枝払い、除間伐等を行い風通しを良くしましょう。また、人工ほだ場の場合は、高温になりやすいので庇陰に十分注意しましょう。

2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払いや除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生

源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、ほだ木から均一にしいたけを発生させたり、次回の原基形成促進ため、ほだ回しや天地返しを行いましょ。

(田中 貴司)

◆葉たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。品質の良い乾葉に仕上げるよう、適熟収穫に努めましょ。降灰が確認された際には、立ち木の水洗いを行い、乾燥後に残っている場合は乾葉での除去を行いましょ。

1 収穫は、各ほ地のたばこの熟度を見極めて行いましょ。特に横掻き合葉は、取り急ぎせず、十分に成熟させて収穫を行いましょ。成熟の目安は、葉先が枯れ、中骨が乳白色になった状態です。

また、立枯病などの病害葉はくじり取りを行い区分収穫に努めましょ。

2 梅雨に入ります。ほ地の排水対策を行い、病害の耕種的防除を行いましょ。

3 乾葉の取ろし時は、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょ。乾葉水分は、支骨が折れる程度が目安です。また各作業時での異物混入に注意ましょ。

4 包を貯蔵する際には、農薬、肥料、燃料など、たばこ以外の臭いを有する物を避けて貯蔵ましょ。

また、中葉系は虫害の被害を受けやすいため、ビニル梱包を行い、口を養生テープ等で閉じましょ。

(中矢恭輔)

なになに農業アラルト

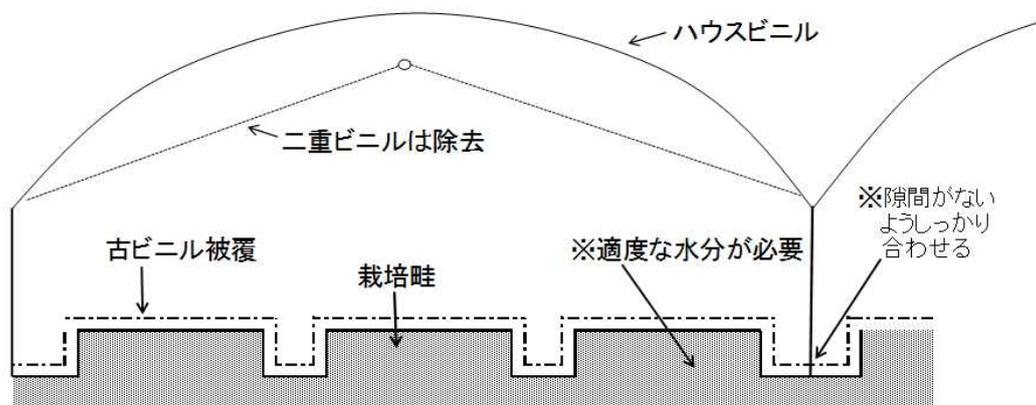
土壌の太陽熱消毒(宮崎方式)について

太陽熱消毒は、臭化メチル代替え技術の一つとして県内の施設野菜の3割程度に導入され一定の成果をあげています。今回は最も土壌消毒効果の高い宮崎方式の太陽熱消毒法について紹介します。

- ① 茎葉等の作物残渣をほ場外に持ち出し片づけます。
- ② 前作で使用したかん水チューブ等で、十分かん水し土壌水分を確保します。(かん水量の目安は30~35t/10a)
- ③ かん水チューブ等を片付けた後に、土壌診断結果に基づいてたい肥や苦土石灰等の土壌改良資材等と基肥を施用します。なお、緩効性肥料や被覆肥料等機能性肥料を使用する場合は、消毒後定植直前に施用します。
- ④ 耕耘後、畦立てを行います。
- ⑤ 古ビニル等で土壌表面をムラの無いよう被覆します。
- ⑥ ハウス内は長期間高温状態となるため、加温機の制御機器等は取り外しハウス外に持出します。
- ⑦ ハウスを密閉し、太陽熱による土壌消毒を開始します。消毒期間は、7月上旬~8月下旬にかけて30日以上行います。
- ⑧ 台風等による強風の被害が想定される場合は、ハウスビニルは除去しますが、マルチ被覆は風で吹き飛ばされないように土のう等で押さえ定植まで継続します。
- ⑨ 消毒効果は天候に左右されるので、温度が十分に確保できない場合には、土壌消毒剤、殺線虫剤等の利用を検討します。
- ⑩ 定植時期になったらハウスビニルを張り替え、マルチを除去し、地温が低下したことを確認し定植します。

太陽熱を利用した土壌消毒は、経費もかからず経済的である上に、比較的作業時間に余裕のある時期に定植準備の作業を実施することで、秋口の作業が軽減され、適期に定植が実施できるという利点もあります。

(郡司 孝幸)



太陽熱消毒の図

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち 穂いもち	並 —	5月下旬に、県内で葉いもちの発生が確認されました。常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、今後注意が必要です。 今年は梅雨入りが早く、いもち病の発生に好条件であるので、早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稲	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	早期水稲の一部で発生の多いほ場が確認されているので、水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 並	アブラムシ類はキュウリモザイク病やたばこ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、手遅れにならないうちに早めに防除します。
施設野菜 ※	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 次期作の発生源になりますので、栽培終了後は植物体を根まで抜き取り、10日間程度施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底しましょう。
いちご ※ (親株)	うどんこ病 ハダニ アブラムシ	前年と同程度 前年より多い 前年より多い	うどんこ病は予防に重点をおくとともに、早期発見に努め、発病初期の防除を徹底します。 ハダニ、アブラムシともに発生が多い状況です。密度が高くなってからの防除は困難なので、早期発見に努め防除を徹底します。
果樹全般 ※	果樹カメムシ類	やや多	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、5月上旬にチャバネアオカメムシが平年より多く誘殺されています。 多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。特に、ウメやモモなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 並	黒点病は、その感染源である枯れ枝の除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	やや多 — 並	ミカンハモグリガの加害は、かいよう病等の発生も助長しますので、夏芽発生園では防除に努めるとともに、来年の結果母枝を確保します。
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノボガ チャノトリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカイガラムシ	やや少 やや多 並 やや多 並 並 並 やや少	カンザワハダニの発生がやや多くなっています。抵抗性が出やすいので、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行います。 5月初旬のフェロモントラップにおけるチャハマキの誘殺数が特に多く、注意が必要です。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからでは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。
<p>1) ※は防除情報を発表しています。</p> <p>2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki です。</p>			